

●水環境・海域（3） （3-B-10-4～3-B-12-1）

本セッションでは、海域の底の部分に注目し、干潟表面での反応に関するもの2編、海底堆積物、底質評価が各々1編、底質改善手法が2編であった。

3-B-10-4は、Mnの触媒作用に注目し、干潟表層においてPAHs誘導体が生成しているとしたものであったが、他の金属との特性、地域特性などを含め普遍性をもったものにするためにもこれからの拡がり期待される発表であった。

3-B-11-1は、ダイオキシン類の海底堆積物を予測するモデルの提案であった。50年後というスケールで実測結果と類似した結果が得られたとのことであり、今後が期待されるが、堆積速度や場所による違い、巻き上げの影響などさらなる検討が望まれる。

3-B-11-2は、底生微細藻類が有機物を生産する一方で、バクテリアを活性化することで分解を促進し、60日間では両者がバランスし、堆積有機物収支に影響を与えなかったとの発表であった。収支バランスの論拠など解析結果に対して質疑が活発に出され、今後はより判り易い結果表現が望まれた。

3-B-11-3は、依然として無生物に近い状態が続く東京都湾奥部などの底層環境を、底質と底生生物で評価したもので、生き物を使っての評価を湾全体で同一手法により継続的に実施し、生息環境の悪化傾向を懸念した結果であった。このような評価が今後も多方面で実施されることが期待される。

3-B-11-4と3-B-12-1は、マット材を用いて底質ダイオキシン類の溶出抑制を行おうとしたものであったが、覆砂を少なくできることも含め、実用化に向けたさらなる研究調査が期待された。

（東京都・環境局 風間 真理）